

シラーの『オルレアンの乙女』について

— 民族主義と国際連帯 —

清 水 純 夫

1

シラーの戯曲『オルレアンの乙女』の主人公ジャンヌ・ダルクは、実在の人物をモデルにしながらも、シラーが自由に創作した人物である。この作品の中では、「ジャンヌは美的な意味における個人であるばかりでなく、同時に＜人間性の高貴な姿＞として、自分の運命によって人間と、市民的フマニテートの理想で言うその人間の完成を象徴すべき、時代を超越した典型」⁽¹⁾であり、「ジャンヌの行為は進歩的な独裁者の特徴を、ナポレオンのような専制君主の進歩的な側面を身につけている」⁽²⁾、「使命にラジカルに身を委ねる一見盲目的で感情の無い冷たい心」は感ずる官能の力に負けるが、「みえる」ようになった彼女はついに「自然の嵐」の中で純化される」⁽³⁾、或いは「ジャンヌの死は破滅でも、犠牲でも、償いでも、カタルシスでもない。シラーがこれまで創作した中で最も光り輝く神化である。」⁽⁴⁾などのように、シラーの描いたジャンヌは一般に極めて肯定的に評価されている。しかし筆者にはジャンヌに関して疑問を抱かざるをえないいくつかの問題点が存在するように思われる。

本論文は、シラーの戯曲の主人公ジャンヌの行為は果たして本当に肯定されるべきものか、について再検討を試みようというものである。そこで、シラーの作品の分析に先立って、まず当時の歴史的背景と史実のジャンヌ・ダルクについて概観しておこう。

イギリスの国王エドワード3世によるフランスの王位継承権の主張に端を発してフランスを舞台に1339年から始まったフランスとイギリスの間での100年戦争も、1400年代になると、フランスの内部も国王シャルル5世の側とブルゴーニュ公の側に分裂し、国王側のオルレアン公やそれに敵対するブルゴーニュ公ジャンが暗殺されるに及んで、個人的な恨みも加わり、事態はのびきならないところまで進んだ。1420年にブルゴーニュ公フィリップは親の仇を討ち、自分の支配地域の拡大を図るべく、イギリス王ヘンリ5世とトロワの和約を結んだが、それはヘンリ5世がフランス王シャルル6世の娘カトリーヌと結婚すれば彼をフランス王として認めるといった内容のものであった。しかし結婚式を挙げて間もなくヘンリ5世は病死する。時を同じくしてシャルル6世も世を去る。そのため生後数カ月足らずの幼いイギリス王ヘンリ6世がフランスの王となることになった。

一方、シャルル6世の後継者問題は複雑であった。彼は在位の途中から発狂し、その王妃イザ

(1)

ポーは身持ちが悪く、王位継承権のある跡継ぎが次々と亡くなっていたため、王の死後、王太子シャルルが後継者になるかと思われたが、この時、実の母イザボーは彼をシャルル6世との間に生まれた子ではないと証言し、不義による私生児として彼の王位継承権を否認した。彼女がこうした行動にでた背景には彼女の実の娘カトリーヌがイギリス王ヘンリ5世の妃となっていた事情もある。こうして強大な勢力を誇るブルゴーニュ公とイザボーの両者を味方につけたイギリスは、圧倒的な軍事力をもって王太子シャルルを打倒すべく、彼に忠誠を誓うオルレアンを包囲し、今まさに陥落させようとしていた。

この時、突然彗星のごとく登場したのがジャンヌ・ダルクである。彼女はドンレミ村の農家の生まれで、13歳の頃から神の声を聞くようになったと伝えられている。

「最初に声を聴いた時、私は神様の望まれる限りいつまでも純潔を守ることを誓いました。13歳頃のことです」¹⁶⁾。

彼女はこの声に忠実に従い、結婚をしなかったため、怒った婚約者によって裁判所に訴えられたが、彼女の勝ちに終わった¹⁷⁾。17歳の時に彼女は、シャルル王太子をランスで聖別させて戴冠させ、天上の神の代理者であるフランス国王にするのが自分の使命であるとの神の声を聞き、その使命に従って村を去り、シノンにいる王のもとに馳せ参じ、神の声の信憑性をめぐっての聖職者による審問を見事にパスして、王たちに自分が神の使いだと認めさせた後、王や側近たちを説得して鎧に身を包み、旗を持ち、白馬にまたがって、オルレアン解放の戦いの先頭にたった¹⁸⁾。しかしジャンヌ自身は人を殺すことはなかったようである。

神の使者を名乗る乙女の登場で兵士の士気は高まり、戦いはジャンヌ側の圧勝に終わり、オルレアンは解放された。彼女の評判はますます高まり、反対にイギリス側の士気は低下していった。続く戦いでもジャンヌ側の連戦連勝で、王太子シャルルはランスに入城することができた。そしてついに王太子は聖油を受けて、神に代わってフランスを統治する国王シャルル7世となったのである。ジャンヌの功績に報いて王は彼女と2人の兄を貴族に叙した。

ジャンヌは戴冠式の後、引き続いてパリを攻撃するつもりでいたが、シャルル7世や側近たちはブルゴーニュ公との講和の方を優先するつもりであった。もしジャンヌの主張に従ってパリを攻撃しておれば勝利はたやすかった。しかしシャルル7世はブルゴーニュ公の休戦の申し出を信じ、あたら時間を浪費し、みすみす勝利する機会を失した。けっきょくパリ攻撃は開始されるが、国王は最後まで乗り気ではなかった。この戦いの最中、ジャンヌは敵の捕虜となり、イギリス領ルーアンに身柄を移される。当時は捕虜となっても高額の身の代金を支払いさえすれば、再びその人間を取り戻すことが可能であった。そのためこのことは広く一般に行われていた。しかしシャルル7世はそのような動きを全くしなかった。そしてジャンヌは異端裁判により魔女と宣言され、火あぶりの刑に処せられた。ジャンヌはフランス国王によって見捨てられたのである。

シャルル7世にとって、戴冠式を挙げる前は、王太子シャルルをランスで戴冠させるのが神の声だと語るジャンヌを神の使者とみなすことは取りも直さず自分が神に認められた正当な王位継

承者だと人々に信じさせることになり、その意味でジャンヌは非常に利用価値のある存在であった。しかし戴冠後はもはやジャンヌは利用価値の無くなったいわば用済みの存在であったし、教会を介さず神の声を聞いたと主張するジャンヌの行為は明らかに異端であり、むしろ体制の根幹を揺るがしかねない由々しきものであったので、彼らが捕虜となったジャンヌの救出など全く考えなかったのは当然のことといえる⁸⁾。唯一の問題は国王が不人情だと非難されかねないことであるが、この点、国王はジャンヌの異端裁判の行われたルーアンを奪還するやジャンヌの事件を再審査するよう命じ、その結果、死後25年たってジャンヌの復権が正式に認められ、国王は不人情の謗りを免れることができた。こうして国王は民衆の批判をかわし、着々とフランスを中央集権化し、絶対王政確立に向かって踏み出したのである。その後、今世紀になってやっと法王庁によってジャンヌはまず1904年に尊者として、次いで1909年には福者として、そして1920年に聖者の列に加えられた。

以上が史実のジャンヌである。この史実をもとにシラーは1800年から1801年にかけて『オルレアンの乙女』を執筆する。しかしシラーは史実をいくつかの点で手直している。以下、シラーの作品に即してみよう。

2

まず、神のお告げについてであるが、その内容についてジャンヌは次のように独白する。

「行け！お前は地上で神たる私の証人になるのだ。

荒金で手足を縛り、
鉄でお前のやさしい胸を覆え！
男の愛が虚しい地上の快樂の罪の炎で
お前の心に触れてはならぬ。
決して花嫁の花冠がお前の巻き毛を飾ることはないし、
愛しい子がお前の胸に輝くこともないであろう。
だが地上の如何なる女性にもまして、
私はお前を戦いの名誉で飾るであろう。

戦いでどんな勇者も臆する時、
フランスの命運が尽きようとする時、
お前はフランスの王旗をもって、
穀物をすばやく刈り取る女のごとく、
高慢な征服者を打ち倒すであろう。

お前は彼の幸運の車輪をひっくり返し、
フランスの英雄の息子たちに救いをもたらし、
ランスを解放し、王を戴冠させるであろう」⁽⁹⁾。

このようにお告げはジャンヌに愛の断念、禁欲、敵の打倒、そして王の戴冠を命じているのである。

またジャンヌは大僧正に夢の中で聖母マリアが次のように自分に語ったと述べている。

「羊を放ちなさい！主はお前を別の仕事にお召しなのです。この旗を受け取り、剣を腰につけなさい！この剣でわがフランス民族の敵を殲滅し、お前の主人である王太子をランスへ導き、王冠をかぶせて即位させなさい！」⁽¹⁰⁾。

「現世での愛に従う時、清らかな乙女は全ての栄光を成就するのです。私を御覧！お前同様、純潔な娘として私は神である主を産みました。そして私自身も神となったのです」⁽¹¹⁾。

三晩立て続けに聖母は登場し、なおもためらうジャンヌを叱るかのようには二度目の夜には次のように彼女を諫める。

「この世では服従するのが女の義務です。辛い忍耐は女の重い運命です。苛酷な奉仕によって女は浄化されねばなりません。地上で仕えた者は天上では偉大なのです」⁽¹²⁾。

この引用から決してジャンヌが喜んでお告げに従ったのではないことがわかる。むしろ義務と欲求の分裂に悩みながらも仕方なくお告げに従ったジャンヌの苦悩が強く感じられる。ジャンヌは心の中に葛藤を抱えながら嫌々義務に従っているのである。お告げに盲従し、良心の呵責を感じることなく敵を平然と殺害できないいわば人間性を喪失した道具のような存在とは対照的に、ジャンヌはお告げに従わねばならない義務と、道具たることを拒否する人間性の板挟みに苦しむ人間なのである。それはイギリス兵モントゴメリーと出会い、命乞いをする彼を殺さざるをえない時に、ジャンヌの口をついて出る次の言葉からもわかる。

「自分で望んだのではなく、神の声に駆り立てられて私はここに来たのだ。お前たちをひどく悲しませるのも決して好きではない。恐ろしい亡霊のように殺害してまわり、死をばらまき、ついには私自身も死の犠牲にならねばならないのだ。嬉しい帰郷の日を目にすることはないだろう。お前たちの仲間をもっと殺し、もっと多くの未亡人を生み出すが、ついには私自身死んで自分の運命を全うすることになろう。だからお前もお前の運命を全うせよ。さあ剣をとれ！命という甘い獲物を求めて戦おう」⁽¹³⁾。これらの言葉から、ジャンヌが不本意ながら殺害を行っていることがわかる。彼を殺した後、ジャンヌはさらに次のようにマリアに訴える。

「敵の光り輝く体を傷つける時、私の心は同情で溶けてしまうようですし、手はあたたかも聖なる殿堂に闖入するかのようには震えます」⁽¹⁴⁾。

さらに、後述するように敵の将軍ライオネルと出会い、相手を打ちのめした後、その目をみつめたジャンヌはどうしても彼を殺すことができず、逃がしてやるが、そのことで彼女は次のよう

に神を糾弾する。

「彼を殺さねばならなかったのだろうか。彼の目を見た時に、そんなことができたであろうか。彼を殺すなんて！むしろ凶刃を自分のこの胸に突き刺したであろう。人間らしくあったために私は罰せられるのだろうか？同情は罪なのかしら？」¹¹⁵⁾

「神は盲目的な道具 (ein blindes Werkzeug) を求めているのだ。目をつむってお前は遂行しなければならなかったのだ」¹¹⁶⁾。

そしてジャンヌは聖母マリアに自分に代わって別の者を選ぶべきだったと訴える。

「もしあなたの力を示そうとなさるのなら

あなたの永遠の国に住む

罪なき者をお選び下さい。

不死の、清らかな、

感じることも、泣くこともない

霊たちをお遣わし下さい。

か弱い乙女を、弱い心の羊飼いを

選ばないで下さい」¹¹⁷⁾。

ジャンヌにとっていわば自然に反する禁欲、愛や同情の断念、敵の殺害を命じるお告げに従うことは、人間性を放棄し、「盲目的な道具」になることであり、ジャンヌはこのような義務に服従することに抵抗をおぼえつつも拒むことはできず、心の中に葛藤を抱きつつ、お告げを遂行していく。このようなジャンヌの苦悩は史実のジャンヌとは大きく異なる点である。

しかし内的葛藤を抱えながらもジャンヌは果敢に戦い、そしてブルゴーニュ公と王太子との和解も実現させる。この、ジャンヌによる両者の和解の実現も史実とは異なる点である。

その後、再び戦場に出たジャンヌの前に「この世のものでない」¹¹⁸⁾謎の黒騎士が登場し、彼女に「汝、強き者よ、如何なる者もお前を負かすことはできない。戦えば必ずお前が勝つ。——しかしもう戦いはやめよ。私の警告を聞け！」¹¹⁹⁾と言い、さらに「あそこを見よ！あそこにお前の進軍の最後の目的地であるランスの塔が聳えている。——高い寺院のドームが輝くのが見えよう。あそこへお前は華やかな勝利のうちに入城し、王を戴冠させ、誓いを果たすであろう。——あそこへは行くな。引き返せ。私の警告を聞け。」¹²⁰⁾とジャンヌを諫めて、姿を消す。黒騎士もちろん史実とは無関係な人物で、シラーが自由に創作した存在であるが、この黒騎士についてはこの後で改めて考察することにする。

黒騎士の警告を無視したジャンヌはたちまちライオネルへの恋心によってお告げを裏切ってしまう。男を愛したことと、敵を見逃したという二つの罪をジャンヌは犯したわけである。以後、この罪の意識に彼女は苛まれる。王の戴冠式で旗を持って先導する時も、ジャンヌは顔面蒼白で、

よろめくような足取りで歩き、ついに彼女は「精霊が追い出す」²¹⁾ような気がして、戴冠式の行われている教会から逃げ出してしまふ。

戴冠式を終え、晴れてフランス国王シャルル7世となった王は、あらためてジャンヌに感謝しようとする、そこへ彼女の父ティボーが姿を現し、ジャンヌを魔女だと告発する。

「この不幸な娘の哀れな父親です。神の裁きの法廷が、ここへ来て、実の娘を告発するように命じたのです」²²⁾。

そして父親は王に向かって次のように断言する。

「あなた様は神の力によって救われたとお思いですか。騙されておいでです。フランスの民衆も目がくらんでいます。あなた様は悪魔の術策で救われたのです」²³⁾。

さらに父親は三位一体の名においてジャンヌに聖霊の仲間か否か答えるように求めるが、ジャンヌは何も返事をしない。そこで父親は次のように彼女を告発する。

「娘が神から遣わされた聖女ですって！ — 昔から悪霊たちが住み着いている魔力のある木の下のお呪われた場所で考えついたことです。 — ここで娘ははかない名声で讃えてもらうために、人間の敵悪魔に不死の魂を売ったのです。腕まくりをさせて、地獄がつけた徴の跡を御覧下さい」²⁴⁾。

俄に雷鳴の激しく轟く中、父親はジャンヌに最後の弁明の機会を与えようとする。

「天に轟く神にかけて答えよ！ 罪が無いと言ってみよ！ 悪魔など自分の心の中にはないと否定し、わしを嘘つきだと罰するがよい！」²⁵⁾

雷鳴は一層激しさを増すが、しかしジャンヌは依然として沈黙したままである。ついに彼女は魔女だとして追放される。

このようにジャンヌは父親の告発による査問に一切弁明しないのであるが、追放され、放浪している時に、彼女は、自分を心配して放浪につき合ってくれている昔の許婚者に、弁明しなかった理由について次のように語る。

「主である神が私に下された運命に私は黙って従ったのです」²⁶⁾。

「父から出たことなので神から出たものと同じなのです。だからこの試練も父の気持ちに叶ったものだと思います」²⁷⁾。

「もし主の御心を盲目的に崇めるのでなければ、私は神の使者に値しないでしょう。それに私はあなたが思っているほど惨めではありません。不自由はしていますが、それとても今の私の境遇では不幸とは言えません。私は追放され、逃亡の途中にありますが、この荒野で自分がよくわかりました。名誉の微光に取り巻かれていた時には、この胸の中に葛藤がありました。世間にとって私が最も羨ましい人間に思われた時、私は最も不幸な人間だったのです。 — 今はもう癒されました。この世の終わりかと思われた自然の猛威は私の友でした。嵐は世界を清め、私をもまた清めてくれました。私の心は平静です。 — 何が起ころうとももう弱音は吐きません」²⁸⁾。

いわば艱難苦行の茨の道とも言うべき荒れた山中の徘徊を通して、ジャンヌは今や主体性を完

全に放棄して神や運命や父親に盲目的に従うことが罪の償いとなること、そしてそのことにより心の平静を見出すことができることを悟った。いわばジャンヌは無私無欲となり、そうなることで彼女の心は浄化されたと言えよう。だからイギリス兵に捕らえられ、ライオネルのところに連行された時も、ジャンヌを追放したフランスを見限ってイギリスの味方になるよう訴えるライオネルに対し、彼女は毅然とこう応える。

「あなたは私の、そして私の国の民衆の憎むべき敵です。私とあなたの間には何の関係もありません。私はあなたを愛することはできません」¹²⁹。

こうしてライオネルへの愛を拒否したジャンヌは、今や完全にお告げを聞いた時のジャンヌに立ち返ったのである。再び神通力が戻ったかのように太い鎖を断ち切ったジャンヌは戦場に疾風のごとく駆けつけ、苦戦に陥っているフランス軍を勝利に導く。しかし深手を負ったジャンヌは、深く悲しむ王たちの見守る中、天国を夢見つつ恍惚として息絶える。この結末は大変感動的な描き方がなされている。

このようにシラーの作品では、ジャンヌの美化と並んで、以下のように王も美化されている点が特徴的である。即ち、ジャンヌはブルゴーニュ公との徹底抗戦よりも和解を主張するため、史実と違って王と対立することはないし、イギリスの捕虜になってもジャンヌは自力で脱出するため、史実のように王に見捨てられて火あぶりにされることもなく、王によるジャンヌ追放も査問で彼女が弁明しないからやむをえなかったことだ、というように王は美化されているのである。

しかしいろいろ疑問がわく。その中でも際立った二つの疑問、即ち、何故王は美化されたのか、並びに、何故お告げは理不尽なことを要求するのか、という疑問について以下考察してみよう。

3

まず、何故王が美化されているかについてであるが、これはシラーがこの作品を執筆した当時のドイツの政治状況に立ち返って考えなければならない。

第一に言えることは、ナポレオンによるフランスへのライン河左岸併合の問題に直面しているドイツ人には和解志向が強いことである。なぜなら経済的発展を目指すドイツの市民階級は真の統一国家を必要としているからである。それが、徹底抗戦を求める史実のジャンヌとは違って、ブルゴーニュ公との和解を求める作品中のジャンヌの姿勢の理由であるし、統一国家の象徴としての王が肯定的に描かれている理由である。

ここにはさらに、フランス革命で国王が処刑されたことで、シラーが、「王を公然と弁護する作家はこの機会に他の作家よりはなにがしかの重要な真理を言うことが許されるし、より多くの信用も得られるのです」¹³⁰と述べているように、王に同情的になったことや、フランス革命で示された未熟な民衆に対するシラーの幻滅が反映しているし、同時にまた後に述べる「美的国家」の実現が困難な状況では、ドイツの君主たちに対しあるべき君主像を提示する方が現実的であるというシラーの判断から行われた啓蒙的説教の意図なども付け加えて考えることができよう。い

ずれにしてもこうしてシャルル7世は美化された。

ところでシラーはジャンヌをして王のあるべき姿勢について次のように言わせている。

「王様、不幸においてそうであったように、幸福になってもいつも人間らしさを失わないで下さい。権力の頂点に立たれましても、苦境の時の友の有り難みを忘れないで下さい。あなたはそのことを屈辱の中で経験されました。民衆の最後の一人に至るまで正義と慈悲を拒んではなりません。なぜなら神があなたのために羊の群れから救い手をお召しになったからです。——あなたは王笏の下にフランス全土を集めて、偉大な王家の創始者となられ、子孫はあなたの前任者たちの時代よりももっと明るく輝くことでしょう。民衆を思う心の中に愛を保持する限り、王家は繁栄することでしょう。高慢だけが王家を滅亡に導くのです。その時には、あなたのために今回は救い手が現れた下賤の者の小屋から、罪に汚れた子孫に破滅が密かにこっそり忍び寄るでしょう」⁽³¹⁾。

ジャンヌの言わんとする内容は、王たる者は権力を握っても高慢になって民衆を忘れてはならず、いつも人間らしくあるべし、というものである。しかしこれがその後の絶対王政によって全く顧みられなかったことは実際の歴史が示しており、それゆえにこそフランス革命が起きたことは、フランス革命の国民議会からフランス名誉市民授与の決議までされたシラーにはもちろんわかっていたはずである。このことからシラーがフランス革命の遠因となったシャルル7世による中央集権的絶対王政という統一国家づくりに疑問を抱いていたことは十分考えられる⁽³²⁾。

そのことはまた、間接的で極めて慎重な表現ながら、ジャンヌの父親によるジャンヌ告発の内容にも認められる。父親がジャンヌを告発する動機は彼女の「高慢」を「罪深い」こととして彼女の目を覚まさせ、神のもとへジャンヌを連れ戻そうとするものである。しかし実はこれは本質的な問題ではない。むしろ重要なことは、父親がジャンヌを神の使者などではなく、単に悪魔にたぶらかされたにすぎないと断言することで、無意識に且つ間接的にはあるが、シャルル7世の王権神授を否定する結果となっていることである。そのことを言わんがためにシラーは史実には無い父親による告発の場面を創作したのだと考えられる。

4

次に、何故お告げは理不尽なことを要求するのか、について考察してみよう。

お告げは王を戴冠させるにあたり、ジャンヌに禁欲、道具たること、モントゴメリー殺害、主体性の放棄、盲目的服従、などを求めている。しかしこれは自分の人格の否定と相手の人格の否定であり、それゆえヒューマンイズムの否定であろう。そもそもヒューマンイズムは一国の中の人間同士の間だけでなく、他国の人間との間にも可能である。だから本来はヒューマンイズムは国際連帯でもありうるはずである。

なるほど、主要な敵はフランスの主権を脅かし征服しようとするイギリス支配層であり、その意味ではこの戦争はフランスにとっては民族主義に基づいた民族解放といういわば防衛戦争であ

る。しかし同時にこの戦争はフランス支配層によるフランス絶対王政確立のための戦争でもある。それゆえ、この戦争はイギリス・フランス両国の支配層の縄張り争いという面と、フランスの市民階級にとって民族主義に基づき独立した統一国家を築き上げるための戦争という二つの面をもつ。後者の場合、フランスの市民階級にとっての敵はイギリス支配層であると同時に、絶対王政確立後に市民階級を支配することになるフランス支配層である。後のフランス革命が、絶対王政が市民階級と敵対するものであることを立証している。そしてそのことはイギリスの市民階級についても当てはまる。やがて勃発するイギリスのピューリタン革命や名誉革命がそのことを裏付けている。

つまりイギリス支配層の手足となるべく動員されているイギリス兵はフランス市民階級にとっては本来敵ではなく、ともに連帯して自国の支配層と戦ういわば同胞とも言うべき存在なのである。ここから国際連帯の意識が生じてくる。モントゴメリーの切々たる哀願や、彼に対するジャンヌの同情は、両者が憎み合った不倶戴天の敵ではなく、いずれも立場上敵対しているにすぎないことを端的に物語っている。王権支配層という彼らに共通の敵の方に目が向けば、両者の間に連帯が可能なことは、先にも述べたようにフランス革命の時に革命を起こした側がドイツ人であるシラーをフランス名誉市民に決めたことから見て取れる。

それはまたライオネルへの愛の場合にも言える。たとえ貴族であれ、進歩的貴族と市民階級は連帯しえるし、またしなければならないこと、そしてそれがとくに遅れたドイツにおいては社会変革と封建主義克服の唯一可能な道であることはシラーもその創作に協力を惜しまなかったゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』などにはっきり示されている。ライオネルの人間性如何ではこの愛は身分の違いを越え、国境を越え、国際連帯にまで高まりうるものである⁽³³⁾。しかし頑なにフランスを敵視する彼は、ジャンヌをイギリス側に無理矢理引き込もうとするだけで、国際連帯の立場に立とうとはしない。

いずれにしても国際連帯に繋がるこのような愛や友情は、彼らが主体性の無い、命令に盲目的に服従する、非人間的な人間にとどまる限りは不可能である。このことが可能であるためには、彼らは理性的で、自立した、そしてヒューマンイズムと愛に満ちた人間であらねばならない。そのような人間のなかでは理性と感性、義務と欲求は調和がとれている。これはシラーが言うところの「美しき魂」の持ち主である。

シラーは『優美と尊厳』の中で「美しき魂」について、「美しき魂では感性と理性、義務と欲求は調和している」⁽³⁴⁾と述べている。シラーの理想とする「美的国家」はこのような「美しき魂」をもったいわば美的人間から成り立つ。その人間性は、『人間の美的教育について』の中でシラーが述べているように、「性格の自立性が保証され、他者の専制的な形式への服従が気品のある自由に席を譲るものでなければならない」⁽³⁵⁾のである。つまり他者に奴隷のように服従する主体性の無い人間であってはならないのである。この人間と「美的国家」についてはさらに次のように述べられる。

「美的国家においては全てのものが — 奉仕する道具さえも最も高貴な人間と同等の権利をもつ自由な市民であり、耐え忍んでいる大衆を自分の目的に無理矢理服従させる知性も大衆に賛否を問わねばなりません。それゆえ美的仮象の国において、平等の理想が実現されるのです」⁽³⁶⁾。

服従する人間ではなく、平等で、自立した、自由な人間から「美的国家」は成る。その人間の内面は「美しき魂」であり、調和しており、そのためこの「美的国家」は欲望に基づく争いなどの起こり得ない、平和な理想郷である。

だがシラーは、現実にはこのような「美的国家」は「純粋な教会や純粋な共和国のように僅か2、3の厳選された圈内にのみ見出し出されるかもしれない」⁽³⁷⁾と悲観的に述べている。少なくともジャンヌによって実現されたフランス王国をシラーは「美的国家」とは考えてはいないのである。

以上のようにシラーは「美しき魂」をもった美的人間と「美的国家」を描いているのであるが、ではジャンヌの場合はどうかというと、明らかに彼女は「美しき魂」の持ち主ではない。なぜなら、彼女の場合には神の命による義務と彼女の欲求は対立し、無理矢理義務に服従しているので「美しき魂」とは言えないのである。

ところで、シラーによると、現実には義務と欲求が調和する状況は稀であり、義務と欲求が対立するケースがほとんどである。その時、人間は義務に従って欲求を断念する悲劇的な決断を強いられる。このような人間はシラーによれば美的人間ではなく、「崇高」な人間である。『崇高について』の中でシラーは次のように述べている。

「美においては理性と感性は調和し、この調和ゆえに美は我々に対して魅力をもつのだ。(・・)。これに対し、崇高においては理性と感性は調和しない。両者のまさにこの矛盾の中に我々の心を感動させる魔力が存在するのだ」⁽³⁸⁾。

ジャンヌの場合はまさに「崇高」な人間に該当する。しかし、同時にまたジャンヌの例から、「崇高」の問題点も浮かび上がってくる。

義務に従うといえれば一見立派に見えるが、しかし問題は義務の中身である。それがヒューマンイズムや理性など人間性に反しない場合には、欲求を抑えて義務に従うのは確かに悲劇的で、崇高で、立派なことであろう。しかし、もし人間性に反する義務を強いられた場合、それに従うことは悲劇的な行為であり、そのような人間は人非人となろう。つまりこのような場合には毅然と義務を拒否する主体性が必要とされる。人間は、自分の理性、ヒューマンイズム、人間性に基づいて、理不尽な義務を拒否すべきなのである。たとえそれが神によるお告げとしての至上の義務であっても例外ではない。ジャンヌは理不尽な内容のお告げには従うべきではなかったのである。

お告げがジャンヌに要求することは人間性に反することであり、それゆえ彼女は内的分裂、良心の苦悩に陥るが、彼女のこの苦悩や、神の命と人間性放棄に対するジャンヌの無意識の抵抗が生み出した幻覚が黒騎士と考えられる。以後、ジャンヌの意識と無意識的願望の分裂は強まり、ライオネルへの愛に道を開くことになるのであるが、果たして無意識的願望が意識に勝り、一時

的に人間性に立ち返ったジャンヌはライオネルを愛し、逃亡させ、お告げを裏切ってしまう。一瞬、ヒューマニズム・国際連帯に道が開かれるかのような印象を与えるジャンヌの行為ではあるが、最後にはジャンヌは追放に甘んじ、身を苛むことで魂を浄化し、彼への愛をきっぱり断念してしまう。このことはジャンヌが人間性を放棄し、盲目的に服従する道具に再び成り下がったことに他ならず、これは国際連帯への道をも閉ざすことになる最悪の結末である。だから G. Kaiser の「ここではジャンヌが以前身を委ねなければならないと信じた道具の盲目性とは違った他の盲目性が問題となっている。——それは外部に由来する使命に決して盲目的、無責任に身を委ねることではなく、盲目的に、大胆に、信頼に満ちて、自分の決断で使命に向かうことである。」¹⁰⁹という、ジャンヌに主体性の点で成長の跡を認めようとする主張には同意できない。ジャンヌの盲目性は以前よりもさらにひどくなったことは明らかであるからである。

そこにはまたシラーの次のような意識が反映しているとも考えられる。即ち、シラーの時代のドイツの統一との関連で、ジャンヌの加わった戦争を肯定できるのは、イギリス兵をフランスから撃退するところまで、即ち民族主義に基づく民族解放のための正義の戦いまでであり、その限りでは場合によってはシラーの目指す「美的国家」の建設も夢ではない。しかし王太子を戴冠させることは絶対王政に向かったの第一歩であり、それこそフランス国民にとっての不幸な第一歩であり、フランス革命を誘発することになる第一歩でもあり、そのためドイツの市民階級にとっては手本とすることはできないことである。このことをシラーは、黒騎士をしてジャンヌにランスに行かないように警告させることで、示したのである。しかしこの警告に耳を貸さなかったため、ジャンヌは、主観的には恍惚とした至福の最期を遂げたのとは裏腹に、客観的には内面的に悲惨な道を辿ったのであるし、フランスもまた政治的には人間性に外れる悲惨な道を辿ることになるのである。

このようにみても、黒騎士の本質は決して、悪霊かタルボットの霊か、などの一般によくなされる議論のレベルに収まらないもっと深いものであることがわかる。その本質が問題なのであって、地獄の霊かタルボットの霊かは二義的なことなのである¹¹⁰。

以上のことから、第二の問いに対しては以下のように答えられるのではないだろうか。反ヒューマニズム、絶対服従という自然に反することを要求するお告げということで、お告げの理不尽さ、信憑性に対する懐疑の念をシラーは人々に抱かせようとした。それは詰まるところ、王を戴冠させて絶対王政に向かって進む政治路線に対するシラーの反対の表明である。しかしストレートに人々に反絶対王政を訴え、美的共和国を対案として提出しえない遅れた反動的なドイツの状況下では、シラーは、フランス革命の王に同情を示すことで表向きは王政支持の印象を与えながら、作品の中では、お告げに従ってヒューマニズムを放棄した行動はその目的をも反ヒューマニズムの誤ったものにしてしまったジャンヌの例を通して、お告げの理不尽さという婉曲的な方法で、さらには黒騎士による警告という暗示的な形で、自分の主張を貫かざるをえなかったのである。

それゆえ、冒頭で紹介したジャンヌに対する肯定的な諸説はジャンヌの持つこの否定的な面の

認識を欠いており、そのためシラーの意に反し、作品を浅薄なものにしてしまっている。

5

このように、史実のジャンヌの功績はフランスを外国支配から解放し、統一に向かって大きな前進をもたらしたことである。とはいえ、ジャンヌが王太子を戴冠させたことは、同時に、統一国家を民衆にとって不幸な絶対主義国家に向かわせる第一歩であり、誤りであった。このことをシラーは黒騎士の「引き返せ」という忠告として、或いは父親によるジャンヌに対する魔女という告発として、さらにはお告げの義務内容のもつ理不尽さとして提示した。しかもそれは自分の「崇高」論に対する懐疑をもシラー自身のなかに生じさせる結果となった。ジャンヌのような「崇高」ではなく、あくまでも国際連帯を可能にするヒューマニズムに徹し、可能な限り、「美しき魂」をもった美的人間たることの追求と「美的国家」の実現を目指すのが人間に課せられた使命なのである。そして統一国家はジャンヌの目指した絶対王政としてではなく、「美的国家」、即ち美的人間による共和国として打ち建てられるべきだとシラーは言わんとしたことが作品分析を通して出てくる結論である。

注

テキストは Schillers Werke. Nationalausgabe. Bd.9, hrsg. v. Benno von Wiese u. Lieselotte Blumenthal. Weimar 1948. を使用。以下N.A. と略す。

- (1) Thalheim, Hans-Günther: Schillers Dramen von Maria Stuart bis „Demetrius“. In: Weimarer Beiträge I (1974) S.28.
- (2) ibid., S.30.
- (3) Sauder, Gerhard: „Die Jungfrau von Orleans“. In: Interpretationen. Schillers Dramen. Hrsg. v. Walter Hinderer. Stuttgart (Reclam) 1992. S.361.
- (4) Wiese, Benno von: Friedrich Schiller. 3.Aufl. Stuttgart 1963. S.744.
- (5) レジーヌ・ベルヌー著、高山一彦訳『ジャンヌ・ダルクの実像』(文庫クセジュ766) 白水社、1995年5月、31頁。
- (6) 村松 剛著『ジャンヌ・ダルク — 愛国心と信仰 — 』(中公新書138) 中央公論社刊、1996年10月、39版、51頁参照。
- (7) レジーヌ・ベルヌー、マリ＝ヴェロニック・克蘭著、福本直之訳『ジャンヌ・ダルク』東京書籍株式会社、1992年9月、66～97頁参照。
- (8) 村松 剛著、前掲書、157頁参照。
- (9) N.A. Bd.9, S.181.
- (10) ibid., S.207.
- (11) ibid., S.207.
- (12) ibid., S.208.
- (13) ibid., S.230.
- (14) ibid., S.231.
- (15) ibid., S.269.

- (16) *ibid.*, S.270.
 (17) *ibid.*, S.270.
 (18) *ibid.*, S.263.
 (19) *ibid.*, S.262.
 (20) *ibid.*, S.262.
 (21) *ibid.*, S.282.
 (22) *ibid.*, S.287.
 (23) *ibid.*, S.287.
 (24) *ibid.*, S.288.
 (25) *ibid.*, S.289.
 (26) *ibid.*, S.296.
 (27) *ibid.*, S.297.
 (28) *ibid.*, S.297f.
 (29) *ibid.*, S.305.
 (30) Brief an Körner. Jena, 21. Dezember 1792. (N.A. Bd.26, Briefe 1. 3. 1790 bis 17. 5. 1794. Weimar 1992. S.172.)
 (31) N.A. Bd.9, S.248f.
 (32) 島谷 謙氏もこの点について、「この劇作品においては、中央集権的な統一国家が民衆を巻き込みつつ成立していく過程、民衆の共同体意志と国家理性が祖国という観念を媒介として交錯し、袂を分つに至る過程が、ジャンヌと国王および宮廷世界との交渉を通じて示されている」と述べている。
 島谷 謙：F. シラーの „Die Jungfrau von Orleans“ — 殉教者の悲惨 —。「ワイマル友の会」研究報告第10号、1985年、149頁。
 (33) この点に関して、G. Kaiser は「個人的な情熱としてはこの愛は彼女の使命からの逸脱である。しかし同時にこの愛は敵への愛としてすでに客観的には、乱した責任を免れえないイギリス人をも含めての、乱れた世界の普遍的な和解の先取りである。」と述べている。愛に肯定的な姿勢を示している点では愛を拒否する他の説に比べて評価できるが、もう一歩進めて階級的連帯と愛の視点にまで踏み込んで考えるべきであった。
 Kaiser, Gerhard: *Johannas Sendung. Eine These zu Schillers »Jungfrau von Orleans«*. In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft* 10 (1966) S.231.
 (34) Schiller: „Über Anmut und Würde“. *Schillers Werke. Nationalausgabe*. Bd.20, hrsg. v. Benno von Wiese. Unter Mitwirkung von Helmut Koopmann. Weimar 1962. S.287.
 (35) Schiller: „Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen. Siebenter Brief“. N.A. Bd.20, S.329.
 (36) *ibid.*, „Siebenundzwanzigster Brief“. S.412.
 (37) *ibid.*, S.412.
 (38) Schiller: „Über das Erhabene“. *Schilles Werke. Nationalausgabe*. Bd.21, hrsg. v. Benno von Wiese. Unter Mitwirkung von Helmut Koopmann. Weimar 1963. S.43.
 (39) Kaiser, Gerhard: a. a. O., S.229f.
 (40) たとえば L. Bellermann は黒騎士は地獄から甦ったタルボットの霊だと言っているし、G. Kaiser は「地獄の使者」だと、また A. Gutmann は「地獄の霊」だと主張している。
 Bellermann, Ludwig: *Schillers Dramen. Beiträge zu ihrem Verständnis*. Zweiter Teil. 5. Aufl. Berlin 1914. S.260ff.
 Kaiser, Gerhard: a. a. O., S.225.
 Gutmann, Anna: *Schillers »Jungfrau von Orleans«*. In: *Zeitschrift für Deutsche Philologie* 88 (1969) S.580.